

# —幼児教育学科学生の「子ども時代に読んだお気に入り絵本」—

## A Questionnaire for Early Childhood Education Students “What's Your Favorite Picture Book in Your Childhood”

出村 由利子  
Yuriko DEMURA

旭川大学短期大学部生活福祉学科生活福祉専攻

キーワード：絵本、こども、ともにいる

### 抄録

子ども時代の絵本体験がどのようなものであり、大人へと成長するうえで絵本体験がどのような役割を果たすのか、幼児教育学科学生への絵本をどのように教育に取り入れるかの手がかりとするためにアンケート調査をした。すぐれた絵本の指標である1) 子どもたちをはずかなくとささい込む、2) ゆっくりと深々と、3) 楽しく面白く美しく、4) いくどでも聞きたくなる、という4つの視点で考察した。学生たちは、子どもの時に絵本を読んでもらうことで時空を超え言葉の世界を旅していた。記述した言葉として十分表現されていなかったが、絵本が子どものすぐ近くに存在していたこと、大人の読み手が存在していたこと、さまざまな情感に心を揺らし、読み手やその時の情景とともに好きな思い出として残っていた。

## 1. 緒言

### 1. 研究の背景

1989年、国連総会で「子どもの権利条約」が採択され、日本は1994年に批准した。子どもの権利条約は、生きる権利、守られる権利、育つ権利、参加する権利を4つの柱として構成されている。2019年は採択後30周年にあたるが、今日本における子どもを取り巻く現状は子どもの権利認識が広がっているとはいえない。2019年5月にWHO総会で国際疾病分類(ICD-11)が約30年ぶりに改訂され、精神疾患にゲーム障害が分類されるなど、経済的効率を重視したIT社会によって生活環境が激変した時代に生を受けた子どもたちの心や脳・からだに異変が起こっている。<sup>1)</sup>2011年には日本初のネット依存専門治療外来が設立されるなど、子どもの心身の成長発達に欠かせない貴重な時間と機会

が奪われない社会をつくることは急務である。また保育園利用児童数の増加、児童虐待などの社会状況の中、保育の質向上をめざして保育所保育指針が改定され2018年度から適用された。どのような保育の環境(人、物、場)が生活や遊びにおける子どもの豊かな経験となるのか、幼児教育に携わる人は真剣に考え、実践しなければならない。

### 2. 絵本に着目した背景

絵本は子どもが最初に出会う本である。幼児教育学科の学生は幼少時に多くの絵本に出会っている。しかし日々学生と接する中で、思い出に残っているのは絵本そのものより、その絵本を読んでくれた親、お気に入りの保育士や幼稚園教諭との思い出であり、その時の情景であることが多い。しかも、それが保育の道をめざす

きっかけになったという学生にも少なからず出会ってきた。

福音館書店で数多くの名作を世に送った編集者松居直は、親と子がともにいて、その生活の時間と空間の中に「言葉」があること。そして「読み手」と「聞き手」がその言葉の喜びを「共有 (Share) すること」に絵本の最も大切な意味と役割があると述べている。<sup>2)</sup> 読んだ時の喜びや楽しみが大きければ大きいほど読み手の声で子どもの中に生涯残り続ける。

また、心理学者の河合隼雄は、心の深層と絵本のかかわりが深いと指摘してきた。心の深層は事実として語れないことが多いが、魂の現実が一番表現しやすい媒体は絵本であるとして、昔話や絵本の重要性を語った著書は多い。<sup>3)</sup> 子どもは生まれたときには相手の立場に立って考えることはできない。しかし、大人のもっていないものをもって生まれてくる。石井桃子はそれを「吸い取り紙のような吸収力のある感覚」と呼ぶ。<sup>4)</sup> 内奥性の次元に開かれやすい存在であるともいえる。だからこそ、絵本や遊びを通して共感、感動など多くの刺激をうけて、見える世界だけでなく、見えない世界、深い次元で相手に共感できる人間性や社会性が養われていくだと考えた。

## II. 研究方法

【研究対象】：2018年度の1年生(再履修者含む)78名、2019年度の1年生92名 合計170名。

【研究期間】：2018年7月と2019年5月に子どもの保健Iの授業内にアンケート配布した。

【研究目的】：幼児教育学科の学生が子ども時代に読んだ好きな絵本とその理由を明らかにすることによって幼児教育における絵本の役割を考える。

【研究方法】：質問項目は1つ「子ども時代に読んだお気に入りの本は何ですか」とした。「その理由や今も印象に残っていることがあれば何でも書いてください」と自由記述欄をもうけた。記述内容は質的帰納的に分析した。子ども時代は中学生までとした。

【倫理的配慮】：個人の特定はせず、無記名で行

い、記述内容が評価に無関係であることを示した。

## III. 研究結果

### 1. 結果 (タイトルに関して) ※1名が2冊記入

〔表1〕3人以上の好きだと答えた絵本のタイトル

14人	はらぺこあおむし
11人	ぐりとぐら
8人	こんとあき
6人	はじめてのおつかい
6人	メッキらもつきらどーん
6人	クレヨンのかくクン
4人	おいしいのぼうけん
4人	ねずみくんのちょつき
3人	きょだいなきょだいな
3人	しろくまちゃんとホットケーキ
3人	かいじゅうたちのいるところ
3人	おおきなかぶ
3人	からすのパン屋さん

計74人/171

〔表2〕2人が好きだと答えた絵本のタイトル

ぐるんぱのようちえん
三匹のやぎのガラガラドン
おばけのてんぷら
人魚姫
さよならママがおばけになっちゃった
てぶくろ
もったいないばあさん
ばばばあちゃん
パパお月さまとって
だめよデイビット
どうぞのいす
パロとケロのにちようび
こすずめのぼうけん
ともだちや
おおさむこさむ

計30人/171

〔表3〕1人だけ好きだと答えた絵本のタイトル

あたらしいいのち	シンデレラ
あるあさ	ジープの絵本
あつちゃんあがつく	ずっとずっとだいすきだよ
あらしのよるに	そらまめくんシリーズ
あのね、サントラの国ではね	わにわにの犬けが
いとしの犬ハチ	たろうとつばき
いないいないばあ	たんじょうびのごちそう
いつでも会える	たまごにいちちゃん
いろ	つみきのいえ
うずらちゃんのかくれんぼ	でこちゃん
うみがこおったら	ティモシーシリーズ
うまれてきてありがとう	としょかんライオン
おおかみと七ひきのやぎ	泣いた赤鬼
おやすみなさい、こっこさん	にんじんのたね
おしゃれねこ	ぬげなくて
おさるのジョージ	ねないこだれだ
おまえうまそうだな	ねこじたなのにお茶が好き
おばけかぞくのいちにち	はたらくじどうしゃ
かぜがはこんだてがみ	はじめてのおるすばん
きんちゃんのひまわり	バムとケロのさむいあさ
きんぎょがにげた	バムとケロのおかいもの
くだものだもの	ハーメルンのふえふき
ゴリラのぼんやさん	ひとまねこぞる
こぐまちゃんのパンケーキ	ベネロペメリークリスマス
さるかにがっせん	ピーターラビットシリーズ
さっちゃんのまほうのて	まあちゃんのながいかみ
サンドイッチサンドイッチ	マッチ売りの少女
三匹のこぶた	まるまる
しろいうさぎとくろいうさぎ	みどりいろのタネ
スイミー	もうぬげない
100階建てのいえシリーズ	森のかくれんぼ
11ひきのねことぶた	もりのてぶくろ
地獄のそうべい	やさしいあくま
まめうし	リサとガスボールの出会い

計 67 人 / 171

## 2. 結果（自由記述について）

瀬田貞二は著書の中で以下のように述べている。私たちはもう子どもだましはやめましょう。刺激だけでごまかすことをやめましょう。着色菓子のようなもの、ぴらぴらしたもの、けばけばしいもの、おどかさだけのもの、支離滅裂なもの、だらしのないものを、本とよぶことはやめましょう。それらを出版して、一度だけであきらまれて捨てられるような商利主義とおろかな無駄づかいを断ち切りましょう。その反対に、子どもたちをしずかなところにさそい込んで、ゆっくりと深々と、楽しく面白く美しく、いくどでも聞きたくなるようなすばらしい語り手を、私たちは絵本と呼びましょう。<sup>5)</sup> 絵本と

呼ぶにふさわしい1) 子どもたちをしずかなところにさそい込んで、2) ゆっくりと深々と、3) 楽しく面白く美しく、4) いくどでも聞きたくなる という4点をキーワードとして学生の言葉を拾い上げた。

### 1) [こどもたちをしずかなところにさそい込む]

自分も絵本の主人公になって旅をしている気分になる「こんとあき」、自分もあったかい手袋に入りたいと思った「てぶくろ」など、楽しみ、悲しみ、寒さなど一緒に絵本の世界に入って体験している記述があった。小さな妹に読んであげたときの静かな雰囲気を出し出す「おやすみなさいこっこさん」。

### 2) [ゆっくりと深々と]

最後にお母さんにぎゅーっとしてもらう場面がとても好き「はじめてのおつかい」、一つ一つの家にはたくさんの愛情と思い出があることが伝わってくる「つみきのいえ」など、大切だよということばがなくても絵や文章から深い愛情を読み取っていた。また、何度読んでも不思議「かいじゅうたちのいるところ」、人が泡になるのが不思議「人魚姫」など答えのない真実を求める記述があった。また、とてもせつない「ごんぎつね」、報われないことが悲しく泣いた「人魚姫」など、体験していない中でも悲しみや苦しみを感じ取っていた。

### 3) [楽しく面白く美しく]

楽しい、面白い、という理由は「はらぺこあおむし」がもっとも多かった。全員、絵がかわいい、色がカラフル、食べ物の数が増えたり変身するしかけが面白い、穴など触って楽しかった、わくわくした、という視覚的触覚的な記憶をもっていた。2人は保育士がぬいぐるみや毛糸をつかったその時の状況そのものを覚えていた。「ぐりとぐら」では、食べたい、おいしそう、匂ってくる、という五感を刺激した理由が多かった。また、自分も作りたいは「しろくまちゃんとほっとケーキ」にもみられ、自分もそこで一緒に食べている気持ちになっていたりと、「から

すのパン屋さん」でも姉と一緒にこれが好きって話し合ったなど、料理や食事の場が印象に残っていた。その他、3人以上に人気があった絵本では全て楽しい、面白いという記述があった。また、うんとこしょどっこいしょ「おおきなかぶ」、めっきらもっきら「めっきらもっきらどーん」、あったとさ「きよだいなきよだいな」、パパお月さまとって「パパお月さまとって」、などかけごえや繰り返しが楽しかったことも人気の原因であった。

美しい、ではどう生きてどう死んでいったかが大切だと感じさせるほんとうに美しい物語だった、と見えない美しさを感じていた「マッチ売りの少女」。

#### 4) [いくどでも聞きたくなる]

何度でも、よく、必ず、いつも、という記述があったのは、転んで100円玉を探すところが好きで何度でも読んでもらった「はじめてのおつかい」、保育士の母がいつも読んでくれた「めっきらもっきらどーん」、母によく読んでもらった「こすずめのぼうけん」、祖母に何度でも読んでもらった「おおさむこさむ」、寝る前に必ず読んでもらった「はたらく自動車」などがあつた。繰り返しには必ず身近な読み手がいた。読み手は、母、祖母、保育士の順に多かった。

### IV. 考察

#### 1. 「こどもたちをしずかなところにさそいこむ」

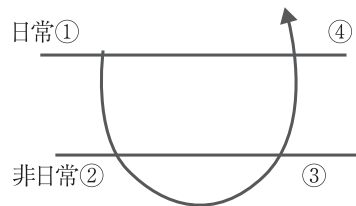
##### 1) 想像のつばさで心を広げることと精神性

瀬田のいう「こどもたちをしずかなところにさそいこむ」とは現実の世界から扉の向こうへ時空をこえていく、つばさを広げることともいえる。美智子上皇后は読書について「ある時には私に根っこを与え、ある時は翼をくれました。この根っこと翼は、私が外に、内に橋をかけ、自分の世界を少しずつ広げて育てていくときに、大きな助けとなってくれました」と述べている。<sup>6)</sup> 石井のいうように吸い取り紙のような吸収力のある感覚や想像力は無意識に持っている力である。それを育てて方向づけていかなければある年齢になってしまうとそれはだんだ

んと眠って消えてしまう。<sup>7)</sup> 子どもは内奥性の次元に開かれやすい存在であり、いつも心が世界に対して開かれている。そして、子どもの外的世界（活動する世界）が広がれば内的な世界（心）も刺激される。想像すること、夢見ることで精神性が豊かに深くなり自立へとつながる。現実の世界から扉の向こうへいくきっかけは日常にあり、子どもの日常の心理の半分以上は内的世界にある。いつも衣装ダンスをあけると別世界のナルニア国へいくことができるのである。<sup>8)</sup>

#### 2) ファンタジーの意味

ファンタジーとは、イマジネーション（形を作ること）＝夢をつくることである。子どもはイメージの中に浸っていることが日常の大きな安らぎになる。大人にとっての概念は内面生活全体を支配している。大人は疲れる週刊誌や新聞を読んでぼやーっと時を過ごす。活字を負うことは一種の気晴らしであるように大人にとって概念は呼吸する空気と同じくらい身近である。それと同じやすらぎは子どもがイメージの中に浸っていること（子どもにとってのファンタジー）なのである。<sup>9)</sup>



〔図1〕

〔図1〕はファンタジーの特徴をあらわしている。<sup>10)</sup> 日常という現実（意識）の世界①から非日常という空想の（無意識）の世界②に行き、③という転機を経て再び④の現実、自分の居場所に往還する。

「かいじゅうたちのいるところ」では、母親に叱られた反抗心が怪獣たちとの遊びにつながり空想がひろがるほど場面も大きくなる。そして遊びきったときふと母親を思い出し母親の夕食

で終わる。子どもは、大人になりたい自立願望が変身や擬人化され現実と非現実を行きつ戻りつ（往還）しながら、親の見えていないところで成長している。

## 2. [ゆっくりと深々と]

### 1) 悲しみや苦しみ

前述の美智子上皇后の言葉を借りると、根を張るということになる。「悲しみの多いこの世を子どもたちが生き続けるためには、悲しみに耐える心が養われるとともに喜びを敏感に感じ取る心、また喜びに向かって伸びようとする心が養われることが大切」<sup>11)</sup>と悲しみと喜び両方がバランスよく育つことが大切で、そのバランスがしっかりと丈夫な根を張ることにつながる。

「かいじゅうたちのいるところ」の作者モリス・センダックは次のように述べている。「子どもは幼くしておそれも悲しみも十分に知っている」<sup>12)</sup>。大人にとって、おそろしいとか悲しいものは子どもには無理であるとする大人のものさしで絵本を選択することは危険である。センダックの「かいじゅうたちのいるところ」が出版当初アメリカではこれを読んでもらった日の夜から突然夜泣きを始める子どもがいて、その原因はこの恐ろしい本のせいだとするほど評判はよくなかった。<sup>13)</sup>しかし学生の記述にもあるように、だんだんかわいくなった、と子どもは深い芸術性を理解している。

また、人魚姫の記述では恋も知らない幼少期に報われないで泡と消えた悲しみを書いた。「スイミー」では小さい力でも多く集まれば大きな力に勝てることが心にのこったと記述した。しかし物語の結果は主題ではない。多くの場面は仲間を失ったスイミーが一人ぼっちで泳いでいるという孤独の場面である。<sup>14)</sup>ユダヤ系の、作者レオ・レオニーは世界を転々とした亡命生活を余儀なくされた惨事の中で作り上げた哲学が根底にある。絶望、不安、孤独の中でも一人で生きていける力に気づき、いのちへの慈しみが芽生えるためには、信頼できる大人が手をつないで同伴することが大切である。

### 2) 水平軸と垂直軸

時間にはふたつの種類がある。一つはクロノス（現実時間）という水平軸、一つはカイロス（空想時間）という垂直軸である。<sup>15)</sup>大人はこの世のことに心を奪われているが子どもたちの日常の半分は空想時間である。しかし二つの時間は対立しない。子どもたちの日常生活には二つの時間がいつも隣り合わせで行ったり来たりしており、そのような子どもの空想の世界を描いた物語を、エブリデュー・マジックという。<sup>16)</sup>水平軸の世界に親や保育者など信頼できる大人たちがいるから安心して絵本や物語を介して垂直軸の世界に向かう。<sup>17)</sup>逆に垂直時間があるから私たちは水平時間を生きていける。

マリホール・エッツのすぐれた絵本「もりのなか」<sup>18)</sup>では少年が紙の帽子をかぶりラッパを吹いて動物たちと行列で歩いている。最後に父親が迎えに来て垂直軸（空想）の世界から水平軸（現実）の世界へともどっていく。垂直軸の世界ではこどもが1人で思い切り遊び、そのあと、信頼できる大人に手をひかれて自然に水平軸の世界へもどることができる。信頼できる大人とは、子ども時代に子どもとして充実した経験をして、今、水平軸の世界を生活している確かな存在として子どものそばにいる人ではないだろうか。

## 3. [楽しく面白く美しく]

### 1) 五感を刺激する—センスオブワンダー

環境汚染を早くに取り上げた「沈黙の春」の著者レイチェル・カーソン<sup>19)</sup>は「センス・オブ・ワンダー」の中でこう述べている。「もしわたしがすべての子どもの成長を見守る善良な妖精に話しかける力を持っているとしたら、世界中の子どもに、生涯消えることのない『センス・オブ・ワンダー＝神秘さや不思議さに目をみはる感性』を授けてほしいと頼むでしょう。この感性は、やがて大人になるとやってくる倦怠と幻滅、私たちが自然という力の源泉から遠ざかること、つまらない人工的なものに夢中になることなどに対する変わらぬ解毒剤になるのです」

多くの学生はさまざまな絵本との出会いで、

感性を揺さぶられ幼少時代に出会った本を今も記憶している。楽しかった、面白かったという言葉にはほぼ集約されて言語化できていない面がある。しかし子ども時代に何かを感じている。教育者は目的やテーマを重要視しがちであるが、カーソンは「知る」ことは「感じる」ことの半分も重要ではないともいう。松居の「絵本は役にたつ、ためになるという底の浅いものでなく、ただひたすらに『楽しみ』なのです」<sup>20)</sup>という基本に立ち返ることがわれわれ大人に求められている。

## 2) 動物と食べもの

人気の「ぐりとぐら」、「はらぺこあおむし」に代表されるように子どもは動物と食べものの絵本が大好きである。動物のしぐさや感覚が自分のそれと見立てやすいことと、動物脳といわれる旧皮質（大脳辺縁系）が乳幼児期にもっとも活動的になる。また、人間の生存欲求である食は誕生直後から食（母乳など）との出会いを経験する。3つの「生きる」がある。「生きている」脳幹・脊髄系、「生きていく」大脳辺縁系、「より生きていく」大脳新皮質である。<sup>21)</sup> 乳幼児期にまず食欲などの本能・情動・記憶をつかさどる大脳辺縁系を十分働かせて、能動的に生きていく土台をつくる。そのうえで思考判断など高次機能によって人間として創造的に生きていけるのである。子どもの身近にある食の経験と、早く大きくなりたい成長願望は、動物に自身を重ねるといふ擬人化を通して人格を育てるため、動物絵本と食べものの絵本が一緒になった絵本が人気なのであろう。

## 3) 意味があることと意味がないこと

「ゲド戦記Ⅲ」<sup>22)</sup> でゲドのセリフがある。「よくよく考えるんだぞ、アレン。大きな選択を迫られたときには。まだ若かったころ、わたしはある人生とする人生を選ばなければならなくなった。わたしはマスがハエに飛びつくように、ぱつと後者に飛びついた。だが、わたしは何をしても、その行為のいずれからも自由にはなりえないし、その行為の結果からも自由にはなりえない

ものだ。ひとつの行為が次の行為を生み、それがまた次を生む。そうなると、われらはごくたまにしか今みたいな時間が持たなくなる。一つの行動と次の行動の間のすき間のような、するということをやめて、ただあるという、それだけでいられる時間、あるいは、自分とは結局のところ何者なのだろうと考える時間をね。」

解剖学者である養老孟司は<sup>23)</sup>、「今の世の中は意味のあるものであふれて、意味がないものは排除されるが、自然の世界は石ころなど『意味のないもの』しかない」と述べている。心の健康のためは「マジメも休み休み言え」というのはユーモラスなユング心理学者である河合隼雄<sup>24)</sup>らしい表現である。時にはナンセンスの世界に思い切り遊び、意味のあることから解放されることは子どもの成長に欠かせない。

## 4) 「美しさ」と「かわいらしさ」

学生の記述で美しいという言葉は一つだけであったように、社会全体に「かわいい」があふれている。語彙の貧しさだけが問題なのではない。保育実習後の学生から、ままごとをしていた子どもがなりたい役はお母さん役ではなくベットの一番人気であったと聞いて驚いてから久しい。生理的なものはできるだけ排除して無機質な世界に行きたいという空気はITの普及とともに広がっている。力ある者がその力による支配を脅かされる心配のないものを「かわいい」と呼ぶのではないか。自ら『かわいい』人でいたいと願う時私たちは周囲の人間をそれと意識せず、暴君に仕立て上げていく。これから子どもや障害者と向きあう人に「かわいい」を禁止立ち止まって考えなければならない。<sup>25)</sup>

松居は、「かわいい」というイメージや感情は後ろ向きのものであり、子どもの成長・発達にとってマイナス以外の何ものでもない。かわいらしい絵本を子どもに与えることは大人の自己満足的感傷にすぎないと断言する。<sup>26)</sup>

美しいとは何かの答え探しは途上である。町中にコマーシャルや騒音があふれ短調の曲が消えつつある今、日本人が失いつつあるもの考えることは急務である。ヨハンナ・シュビリが

書いたアルプスの少女ハイジがアルプスの山の夕焼けをみて「どうしてあんなに赤くなるの」とたずねる。おじいさんは「あれはお日様がさよなら—っていう時に一番美しい姿を見せるんだよ」と答えるとハイジはへーそうかと感動する。<sup>27)</sup>「霊性の奥の院は実は大地の座にある」と述べたのは禅師鈴木大拙である。<sup>28)</sup> 美しさとは、自然に近づくことによってその答えに近づくのかもしれない。

#### 4. [いくどでも聞きたくなる]

##### 1) 繰り返しの意味

口承文芸学者の小澤は<sup>29)</sup>「子どもは、もう知っているものと出会うのが好き」と述べている。本人が満足するまで堪能させる。その満足や安心が子どもの成長を促し次のステップへと変化していく。子どもだけでなく、大人の場合も例えば年末の第9や忠臣蔵のように、「もう知っているものとまた会いたい」と願う、これは人間の根本的な願望である。

「おおきなかぶ」では、うんとこしょどっこいしょと、みんなで声をだしたのが楽しかったと書いている。もう知っているのに、今度は抜けるかな、今度はネズミが出てくる、など毎回わくわくして面白がる。感動体験の繰り返しが子どもの心・魂を育てる。<sup>30)</sup> 子どもは生後6か月すぎると頻繁に耳にする親しみのある語句にメロディとしての響きで伝わる。<sup>31)</sup> 0才でも簡単な話は耳で聞いて楽しむので、話にならない意味がない言葉や擬態語で十分楽しむことができる。絵本でもわらべうたでも繰り返し日常的に聞かせ、語り手の存在・その時の全てがまるごと乳幼児の心奥に降り積もる。

日常は変化するものと変化しないもので成り立っている。日々の暮らしは一見同じことの繰り返しである。しかし「ぐりとぐら」は、子どもにとって身近な兄弟の日常の生活観が強いことが成功した要素であり、子どもの心がくつろいで安心できる世界が絵本になっている。<sup>32)</sup>

昨今は、変化こそ大事である、繰り返しの毎日つまらないと思う風潮がある。「ハレ」と「ケ」の「ハレ」=非日常であるイベントにあふ

れ、子どもを連れたイベントの渡り歩きが市民権をえている。しかし行事なしという幼児教室や極力行事を減らしている保育園があることも事実である。幼児教育にかかわる大人は立ち止まって、日常の重要性や繰り返す意味を再考しなければならない。毎日が同じではないことを子どもたちは知っているのだから。

##### 2) 「ともにいる」絵本体験

絵本は子どもに読ませる本ではなく、大人が子どもに読んである本である。親と子がともにいて、そのひと時の時間と空間のなかに絵本の言葉の世界があり、読み手と聞き手がその言葉の喜びをわかちあい、共有することが絵本の意味である。<sup>33)</sup> 絵本には絵と文がある。編集者であった松居は絵本を作る際、①絵がことばを語りかけているか(絵を読む)、絵を読んだだけで物語が読み取れるか、次に②文を一語一語声に出して、文字の言葉に隠されている言葉の生命を目覚めさせる。耳でも確認する。そしてもっとも留意しているのは物語を目に見えるように文が語りきっているかを重要視する。<sup>34)</sup> 子どもの耳に説明的な文は禁物である。子どもの生活体験や気持ちを受け止める絵と文が一体となった時、子どもは物語世界へ共感して入り込むことができる。例えば「おおきなかぶ」の挿絵はシベリアで抑留生活を送った彫刻家の佐藤忠良である。そのように丁寧に作られた優れた美術や芸術的な絵本は時を経て色あせることはない。

このように絵本は読み手と聞き手が一緒になって作り上げることによって、はじめて生命あふれ躍動感に満ちたほんとうの絵本にできあがる。聞き手と読み手がいて絵本が完成するのである。音読には読み手の固有のひびきやリズムがある。本の言葉と物語体験は読んだ時の喜びや楽しみが大きければ大きいほど読み手の声で子どもの中に生涯残り続ける。学生たちも読んでもらった人のことを良く覚えており、読み手が好きな本はすぐわかり本に共感している喜びがことばで伝わってくる。絵本体験は読み手なしではありえない。

### 3) いつでもイエスという

学生たちの好んだ絵本のほとんどはハッピーエンドであった。幼いころに出会ったお気に入りの本は自らが体験した幸福感や満足感として大人になっても鮮明に残っている。昔話を聞いたり読んだりして育った人はそえだけで人生に対する抵抗力がつくとよくいわれる。<sup>35)</sup> 清水は「児童文学や昔話は、人生を肯定的にみる下地をしっかりと子どもの中につくる羅針盤あるいは海図」と呼んでいる。<sup>36)</sup>

人は平和を願いながらも歴史や過去から学ぶことなく今も世界中で民族同士の争い、戦争、環境破壊など様々な危機や悲惨さに直面している。IT社会がさらに国や人々の分断を広げて、子どもたちは見えない未来に不安や葛藤を抱えている。

そんな中で「生きてごらん、苦しくても生きてごらん、大丈夫だよ」と背中を押してくれる存在は欠かせない。<sup>37)</sup> 人生の最後は誰でも病気や死という嵐に直面する。大人さえもわからないことに向かう時「それでも人生は生きるに値するよ」と絵本や児童文学が励まし、羅針盤となってくれたら心強く思い、安心して前に進めるに違いない。神谷は<sup>38)</sup> 幼児期から学童期を「来るべき嵐の前の静けさ」と表現した。その嵐がくるであろう心の旅にあって、一番大きな基盤となるものは幼児期に用意される基本的信頼である。

ナチスの収容所から奇跡的に生還し「夜と霧」をあらわしたV・E・フランクは「大切なのは人生に何を期待できるかでなく、人生が自分に何を期待しているかである」と語っている。<sup>39)</sup> 世の中が悪い大人が悪いと言い続けるのではなく、常に人生を肯定し続けて前を向いて生きていかなければならない。人生の師となり、不安にゆらぐ自分をしっかりと立たせてくれる基盤、「いいよ、大丈夫だよ、きみは大切な人だよ、といつも声をかける大人や絵本に幼児期に出会うことは基本的信頼をつくることに大きな助けとなる。

### V. おわりに

昔の日本人は花鳥風月が基本であったため感覚で世界をとらえるのが得意であった。しかし今の子どもたちは生まれてから感覚でとらえるという経験がないと言われている。<sup>40)</sup> しかし、学生たちは、子どもの時に絵本を読んでもらうことで時空を超え言葉の世界を旅してきた。記述した言葉として表現していなくても、子ども時代に読んだ好きな本を覚えていたことは、絵本が子どものすぐ近くに存在していたこと、大人の読み手が存在していたこと、さまざまな情感に心を揺らし、読み手やその時の情景とともに好きな思い出として今も残っていることを意味する。文献をよみ絵本を再読する過程で絵本が好きな理由を言語化・カテゴリー化する意味を感じなかったので質的研究としては未熟かもしれない。何より大切にしたのは学生の言葉を何度も読み、俯瞰し、学生たちが絵本を読んでいる姿を想像し、思考するより感じることであった。その結果、学生たちはしっかりと子ども時代を生きて成長してきたことを確信できた。幼児教育をめざした学生だからこそその結果かもしれないが、幼児教育現場にあるわれわれは、「ためになる本」でなくても、子どもの持っている力、絵本の力を信じて一番大きな読み手と「ともにいる」という一番大きな人間体験を一人でも多くの子どもたちに伝えたい。何よりしなければならないのは大人が子どもの本の世界に飛び込むことである。

最後は石井桃子の言葉で終わりたい。子どもたちよ、子ども時代をしっかりとたのしんでください。おとなになってから老人になってから、あなたを支えてくれるのは子ども時代の「あなた」です。<sup>41)</sup>

### 引用文献・参考文献

- 1) 日本子どもを守る会編：子ども白書 2019 p.100-101
- 2) 松居直：絵本は心のへその緒、NPO ブックスタート 2018
- 3) 河合隼雄他：絵本の力 岩波書店 2001
- 4) 中川李枝子・松居直他：石井桃子のこと



- ば 新潮社 2014
- 5) 瀬田貞二：絵本論 福音館書店 1985
- 6) 美智子：橋をかける－子供時代の読書の思い出 文藝春秋 2009
- 7) 4) 同上書
- 8) C.S ルイス 瀬田貞二訳：ライオンと魔女 岩波少年文庫 1985
- 9) 高橋巖：シュタイナー教育を語る 角川選書 1990
- 10) 工藤左千夫：すてきな絵本にであえたら 成文社 2004
- 11) 6) 同上書 p.38
- 12) セルマ・G レインズ 渡辺茂男訳：センダックの世界 岩波書店 1980
- 13) 吉田新一：東京子ども図書館「こどもとしゃかん」誌 2017 152号
- 14) 松居直：絵本のよろこび 日本放送出版協会 2003
- 15) 河合隼雄：子どもの本を読む 岩波現代文庫 2013
- 16) 15) 同上書 p.26
- 17) 清水眞砂子：子どもの本のまなざし 洋泉社 1995
- 18) マリー・ホール・エッツ文・絵 まさきりこ訳 福音館書店 1963
- 19) レイチェル・カーソン 上遠恵子訳：センス・オブ・ワンダー 新潮社 1996 p.23
- 20) 松居直：絵本・ことばのよろこび 日本基督教団出版局 1995
- 21) 時実利彦：人間であること 岩波新書 1970
- 22) アーシュラ・K. ル＝グウィン 清水眞砂子訳：ゲド戦記Ⅲ「さいはての島へ」 岩波少年文庫 2009
- 23) かこさとし：世界と子どもの不思議とともに－養老孟司との対談－価値観が変貌する世界で人間が変えるべきこと－ KAWADE 夢ムック文藝別冊 2017
- 24) 河合隼雄：こころの処方箋 新潮文庫 1998
- 25) 清水眞砂子：大人になるっておもしろい？ 岩波ジュニア新書 2015
- 26) 松居直：絵本を読む 日本エディタースクール 1983
- 27) 大人への児童文化の招待（下） p.136
- 28) 鈴木大拙：日本的靈性 岩波文庫 1972
- 29) 小澤俊夫：ちいさい・おおきい・よわい・つよい 124 痛みの医学 ジャパンマシニスト社 p.135 2019
- 30) 松岡享子：えほんのせかいこどものせかい 文春文庫 2017
- 31) 正高信男：0歳児がことばを獲得するとき 中公新書 1993
- 32) 松居直：松居直と「こどものとも」 ミネルヴァ書房 2013
- 33) 15) 同上書 p.19
- 34) 15) 同上書 p.124
- 35) 高山千津子：絵本でふくらむ子どもの心 アリス館 2003
- 36) 清水眞砂子：幸福に驚く力 かがわCブックス 2006
- 37) 清水眞砂子：不器用な日々 かがわ出版 2010
- 38) 神谷美恵子：こころの旅 日本評論社 1974
- 39) V・E・フランクフル 山田邦男訳：それでも人生にイエスという 春秋社 1993
- 40) 奥本大三郎対談集：本と虫は家の邪魔－養老孟司との対談－感覚でとらえることの大切さ－ 青土社 p.243 2018
- 41) 4) 同上書 p.1 扉

出村由利子